

ハロルド・ピンター 『こびとたち 小説』 (4)¹

細 川 眞

III

26

何か言った？

何も言わないぜ。

何も言わなかったんだね。何も。しかしまたやってるよ。

やってる？ マークは言った。

きみはまたやってる。

四時だ。おれは疲れた。

きみは疲れたらどうする、寝るのか？

その通りさ。

丸太のように寝るんだね。

そう。

起きたらどうするの？

昼間は歩く。

きみは行き先を確かめるのかい？

足の向くままに行く。

一つ尋ねたいんだが、とレンは言った。

だろうな。

きみは進んでそれに答えるかい？

いいや。

しかしきみは尋ねないと言う。もしきみが答えず、そして尋ねないなら、きみはどうするの？

昼間は歩く。

そして丸太のように寝る？

その通り。

きみは歩いていない昼間は どうする？

それは質問か？

もう一度言って？

それは質問か？

どんな質問？

続けるよ。

どんな質問？

おまえはおれに聞こうとしている。

それがどうしたの？

それは質問か？

ぼくがきみに尋ねようとしているのはこれではないよ。

では何だ？

別のことだよ。

全く別の問題。

それで、さあさあ。

いいよ、続けるよ、とマークは言った。

レンは立ち上がった。

どういふつもりなの、続けるとは？と彼は言った。ぼくはきみに聞いた。きみはそれに答えなかった。

何だったっけ？

昼間、歩いていないときはどうするのか？

休むさ。

どこで休む場所を見つけるの？

あちらこちらさ。

承諾を得て？

必ず。

しかしきみは好みがうるさくないかい？

そうさ、おれは気難しいぜ。

休む場所を選んでる？

時々は。

そしてそれはどこでだってあるのかい？

何がいる？

家を持ってる？

いいや。

何て言った？

いいや。

それじゃきみはどこにいる？

家と家の間。

レンは腰を下ろした。

きみは神を信じる？

え？

きみは神を信じるか？

誰を？

神だよ。

神？

きみは神を信じるの、信じないの？

おれが神を信じるかだって？

そうだよ。

もう一度それを言ってくれるか？

ビスケットをどう。

有難う。

きみのビスケットだよ。

二つ残っているぜ。一つはおまえが食べるよ。

レンは立ち上がった。

きみはわかってない。きみはわかることがないだろうな。

そうか？

何が重要なかわかっているの？ 何かわかっている？

いいや、何だい？

大事な点は、きみは誰だってことさ。何故かとか、いかにとか、何かとかでさえない。ぼくは、何かはわかる、多分十分はつきりと。ぼくは多分、きみは何者かの何かであることはわかる。しかし何にせよ、きみは誰なんだ？ きみはきみ個人の鍵を、ただ、それだけを受け入れる特定の鍵穴に差し込むことができるから自分は誰だかわかると、言ってもむだなんだよ、なぜならその鍵穴は故障しないと保証付きではないし、決定的でもないからさ。ただきみがこういう信念を告白したいからというのは、ぼくには何の関係もない。それはぼくに全く関わりはないよ。

レンは部屋中を歩いた、手はずきずきした。

たまに、あのね、ぼくはきみという人間の一部に気づいていると思う、しかし、それは全くの偶然だ。ぼくたち双方における単なる偶然。気付かれた者と気づいた者。それは偶然に違いない。ぼくたちは継続するのにそのような偶然に依存しているんだ、そしてぼくたちは偶然気づく、あるいはそうであるように見える時、そのとき、それはまた幻影であるかもしれないということは重要ではない。

彼は部屋の真ん中に立っていた。

ある時間に、きみはどんな人間か、あるいはぼくにはどんな人間のように見えるか、あるいはきみにはどんな人間であるかのように見えるかは、非常に急に、非常に恐ろしいほどに変化するんだ、ぼくは本当にそれに追いついていくことができない、そしてきみだってまったくできないと確信するよ。しかしきみが誰かなのは、ぼくは認識し始めることすらできない、そして時々ぼくはそのことを全く完全に、非常に強烈に

悟るのでぼくは見えない、そして、ぼくは自分が見るものをどのように確信できようか？ きみには番号はついていない。そこには捜し出す何があるというんだ、確信するため、多少確信するため、このいまましい大混乱からいくらか休息を得るために？ きみは非常に多くの映った影の合計だ。どれくらい多くの影か？ 誰の影か？ きみができているのはそれか？ 潮の流れはどんな浮きかすを残すのか？ 浮きかすには何が起こる？ それはいつ起こる？ ぼくは起こるものを見たことがある。しかしぼくはそれを見ても話せない。ぼくはただ指を指し示すことができるだけだ。ぼくはそれをするこゝとさえできない。浮きかすは壊れ、吸い込まれていく。ぼくはそれがどこへ行くのか見えない。ぼくは何を見たのか？ ぼくが見たものは、浮きかすか、実体か？ それがどうしたというのか？ すべてこのことによって、きみはそこに立って、きみは自分が誰かをわかっているとぼくに言う権利が与えられているのか？ それはとんでもない不適切なことだ。そこには大きな不毛の荒野があり、風がやんでいる。多分きみはぼくに確信させることができる。きみはぼくを納得させることができるか？ しかしきみはほとんどそうできない、なぜならきみはいつも自分が誰かをわかっているとっていて、それ故ぼくはきみを信用できないからだ。もしきみが、ぼくが信じられるか、あるいは信じ始めることができる何かをただ言うことができるとするなら、ぼくはきみをきれいな刃で殺し、そして二度とそれについて考えることはない。しかしきみはぼくが欲しい答えを与えることは絶対にはないだろうから、ぼくはきみを殺せない。きみもピートも。きみたち二人とも気を付けた方がいいよ。それは全く非常に単純なことだ。きみはピートの「黒い騎士」かもしれない。彼はきみの「黒い騎士」かもしれない。しかし、ぼくには一つのことをわかっている、それは、ぼくが二人の「黒い騎士」に苦しめられたということだ。そしてきみたちが誰なのかがわかるまでは、ぼくは自分が誰なのかをどうしてわかるうか？

それは適切ではない。

いやそうではない。

「黒い騎士」について言ったこれは全く何のことなんだ？

そこに一人いる。「黒い騎士」が。カーテンの後ろだ。ピートがきみのだし、きみは彼のそれだ。きみたちは互いをもとにして生きている。

おれたちはとても仲良くやっているぜ。

それを聞いて嬉しいよ。

わかった、マークは立ちながら言った。言うことはたった一つしかないぜ。

気を付けろよ。

ぼくたちには何が必要なのかわからない。しかしそれが何だろうとも、それを得ることはないよ。

なぜない？

なぜってそれはもうあるから。

レンは腰をおろして、目を閉じた。

やあ。

やあ、おまえか、入れよ。

ちょっと一回り散歩しておまえに会おうと思ったんだ、とマークが言った。

座れよ、とピートは言った。まだ雨降っているか？

いや、降ってたか？

じゃあ、降ってなかった？

うん、この四十五分はな。

四十五分も歩いていたのか？ おまえがそれをくわえているとは思わなかったな。

マークは笑った、そしてパイプを詰め始めた。

どこでそれを手に入れたんだい？

おれのだよ。乾かそうと思ったんだ。

何を吸っているんだ？

「三人の尼僧」だよ。

いい匂いをしてるぜ。

そうさ、気分転換になるぜ。

自慢話だな。

うん、いい状態だよ、このパイプ。おれは丁度きれいにしたところだ。

飲みたいか？

わざわざいいよ。

パイプを掃除したり、散歩したりして。おまえはどこからこのエネルギーを得てるんだ？

おまえはあの女を知ってるか、ソーニア？

誰だい？

あのパーティでおれと一緒にだったやつ。

ああそうだ。

今夜会うことになってるんだ。

それがそれとどんな関係があるんだい？

うーん、パイプはあいつの好みに合っているとおれは決めたんだ。

なぜ？

そうだな、とマークは言った、それは壮齢さを強調する。

その調子がんばれだな。

おまえはつけ込めるようにならなければな。

誰に、女か？

いいや、一緒。必要ないさ。それ全くのふざけだよ。

タバコ吸ってもいいか？とピート言って、タバコに火を付けた。

ほとばしる雨が窓を打った。

ほら、ピートは言った。

見てみる。

うん。

秋はすぐ終わるな、今年は、とマークは言った。おれの言うことを聞いてごらん。

おまえの言うとおりでろうな。

彼らは雨を見た。

おれはくたくたに疲れたよ、暑さで、とマークは言った。丁度欲しかったのはそれさ。

そう。

マークはパイプの先をつついた。

ところで、調子はどうだい？

それほど悪くはない。

何をしていたのだ？

ピートは身震いし、ジャケットを着た。

そんなに元気に見えないが、とマークは言った。

実際のところ、現在、少々混乱している。

どのように？

ああ、とピートは顔をゆがめた、馬鹿げた成り行きだ。

何があったんだ？

最近ヴァージニアに会ったことがあるか？

ヴァージニア？ いや。

ああ、おれもだ。

おお？

あいつはおれに汚いことをした。終わったんだ。

どういうことだ、これは全く？

あいつに価値はなくなった、とピートは言った。骨折れ損のくたびれもうけだった。

あいつはがらっと変わってしまった。

何があったんだ？

ああ！ とピートは言った。あいつはソーホーで何人かのグループと交わっていた、

それだけだ。あいつはふしだらになった。万事終わったんだ。

どうりで彼女を見かけていないと思った。

そうさ、二人ではあいつに休息が必要だと一致してた。二週間。しかしやつは戻ってこなかった、それがすべてさ。

それで。

いや、とピートは言った。もしそれがあいつの望んだやり方だとすれば、あいつはそれを手にできるのさ。

おまえは休息すべきだと同意したんだろ？

うん、いいんだ。おれがあいつの言い分を理解しなかったと思わないでくれ。おれは

わかってた。

彼女はそれを必要としていたんだ。

いいかい、マーク。あいつは休みを必要とし、そして取った。おれはそれを認めた。しかしおれたち二人がこのあいだずっと背負わなければならなかった重荷を考えれば、二人は十分以上に対処してきた、おれの考えでは。しかし確かに、あいつの休息におれは同意したが。あいつは何をやってる？ 窓からすべてを投げ出すんだ。何のため？ ほんとに、あいつはおれに関する限り見込みのないやつだよ。あいつが共に自由に遊び回っている類いの連中や、その場所をおまえは知っているか？ おれはわざわざそれを口にすることすらしたくないぜ。

しかし彼女はおまえの保護領ではないぜ、とマークは言った。どうやっておまえは彼女の行動を制裁できるのか？

おい、そうではない、とピートは言った。おれはこの状況についての最後の考えを述べているんだ。

うん、おれはおまえが言おうとしていることはわかる。

おれがあいつを酒に追いやったんだ。いいさ。ページを次にめくろう。

雨が窓ガラスを滑り落ちた。

もうたくさんだ。

おれが行って彼女に会ってみようか？とマークは言った。

なんのため？

彼女が何をしているかを見してみる。

あいつがどうしているかはお前に言っただろ。

確かに、しかしそれほど単純なことではないかもしれないぜ。

どういう意味だ？

多分おれは何か役に立つことができるぜ。

役に立つこと？

事態が実際どんな状態かを見つける。

ピートは立ち上がって、窓の上半分を閉めた。彼は、テーブルに戻ってきて腰を下ろした。

することは何もない、と彼は言った、する価値は何もないぜ。

わからないよ。

そう、ひどい仕打ちだった。確かに。しかし率直に言うとそのことはもうこれ以上いいんだ。

彼女と接触してみるぜ。事態がどうなってるのか見てみる、とマークは言った。

どんな資格でだ？

おまえの友人として。

それはおれの知った事ではない、おまえがあいつに会いたいとしても。おれは行き詰まった。全て終わり、すぐに片付くだろう。おれに必要なものは、新鮮な一息の空

気だけだ。

彼らは部屋に座った。

まだ雨が降っている。

一晩中降ると思う、とピートは言った。

28

ヴァージニア？

もしもし？

マークだよ。

こんにちは。

ハガキもらったよ。

よかった。

いずれにしてもきみに電話するつもりだったんだ。

そうだったの？

どうしている？

何も。

おれは家にいるよ。

訪ねて行くわ。

今？

ええ。

じゃあ、後で。

ところで、これはすべてどうしたんだい？ 二人が腰を下ろした時、マークは微笑んだ。

部屋は静かだった。彼女は足を組んだ。

すべてって何が？

ピートだよ。

それには何も無いわ、と彼女は言った。それは終わったのよ。

それだけ？

他に言うことは何も無いわ。

何も？

ええ。

彼女はバッグを開けて、タバコの箱を取り出した。マークは立ち上がり、そして彼女の椅子の上に身をかがめ、マッチを擦った。彼女は肘掛け椅子に深く腰を掛けた。彼は腰を下ろした。

それでは他に言うことはないんだね、えっ？

あれ以上長く続けられなかったの。灰皿ない？

火床に入れろよ。

彼女は灰を火格子の中にはじき落とし、そして耳の上の髪の毛を撫でつけた。

チッ、チッ、彼女は微笑んだ。自分でこの部屋を片付けているの？

おれじゃない。掃除婦だ。

洗い物はどうなの？

それはおれがやる。

今日は済ましたの？

今日？ いや。

やってあげようか？

いいよ。

彼女はカーペットに脚を伸ばし、煙を吐いた。

わたしは以前あなたの台所で洗い物をしたことがあるわね。

覚えているよ。

彼は咳をし、胸をたたいた。

ひどいわね、彼女は言った。

それで、いいかい。きみはピートのところに戻るつもりはないんだね？

ないわ。そのせきに何か飲んでるの？

いいや。

彼はたんを切った。

遊び歩いていると聞いたんだが。

そうとも呼べるわね。

そう言える、えっ？

タッカーと言う男と付き合っているわ。

南西部地方の？

彼は北米インディアンよ。

おれもそうだ。

いいえ、あなたは違うわ。

おれは何だい？

彼女は灰を火床の中に払い落としした。

タッカーだって？

タッカー。他に言うことは何もないわ。

ところで、あることについては何か言うことはあるだろ、とマークは言った。

そう思うわ。

バコを渡しな。指を燃やしてしまうぜ。

彼は彼女の手からそれを取って、それを消しそして再び座った。

学校はどうだい？

今は休暇中よ。

ああそうだ、もちろん。

あなたもそうね。

うん、そのとおり。

長いのね。

全く長いよ、彼は言った。

いつあなたは仕事をするつもりなの？

—すぐしなければいけない。

どこで？

どこでも。

彼女はバッグを開けた。

もう一本。

いや、おれのを。

彼女の上に傾きながら、彼は彼女のタバコに火を付けた。

有り難う。

あれは美しい服だ、と彼は腰を下ろして言った。

ありがとう。

どういたしまして。

マークは部屋を横切って彼女を見た。

なぜじっとわたしを見ているの？

いつも見ていたのと同じ理由だよ。

顔が赤くなるじゃない。

何故ぼくにあのハガキを送ってきたんだい？

あなたに会いたかったからよ。

なぜ？

なぜわたしに電話してきたの？

おれはピートに、きみに電話すると言ったんだ。

ああ？

おれはきみに話したかったんだ。二人で話して以来長い時間がたつよ。

わたしたち今までほとんどお互いに話したことがなかったわね、とヴァージニアは言った。

彼は立ち上がって、タバコを消した。

きみをかきな、と彼は言った、消すから。

彼は彼女の手からそれを受け取って、そしてそれを消した。彼は座った。

教えてくれ。

ええ？ ヴァージニアが言った。

きみは足跡を全く残さず雪の中を走ることができるかい？

そう思うわ。

きみはそうすることができるに違いないんだね。

できると思うわ。

本当に？

できると思わないの？

いいや、思う。

あなたはそのことをいつでも知っていたわ。

おれは常に知っていたよ、と彼は言った。そこ、きみの目の中に出てる。

いつもそこにあった？

いつも。そしてきみの体の中に。

いつもわたしの体の中に？

そう、常に。

そしてあなたの体の中にも、と彼女が言った。

本当？

ええ。

きみの体、と彼は言った。それはいつもきみの体の全てにあった。

いつも。

ぼくはきみの膝より上の脚を見たことがない。

ないわ。

スカートを持ち上げてみて。

むむ？

スカートを上げて。

このように？

そうだ。もっと。

このように？

離して。

このように？

脚を組むのを止めて。

このように？

それでやつはおれが馬鹿だと思っているんだね。

彼らはベッドに横たわっていた。

あの人は誰でもそうと思っているわ。

しかしやつはきみに、おれが馬鹿だと言ったんだな？

非常に多くのことを言った。

いいや、しかしおれは正確に知りたい。

なぜ？

教えてくれ。

もう言ったわ。

あいつがそう言うのを聞いたんだな。

あなたについて言ったこと全てからすると、と彼女は言った、あの人はあなたに敬意をいただいているとは思わない。

あいつはおれに敬意を払っていないし、そしておれが馬鹿だと思っている。

しかしあなたはわかっていないわ、と彼女が言った、あの人は誰にも敬意を持ってないのよ。あの人は全ての人を憎んでいるのよ。

ずーと今までか、ええ？

あの人のことを忘れましょう。

マークはベッドの端に座って、頭を引っかいた。

おれが理解できないのは、もしやつがおれを馬鹿だと思うなら、なぜおれにわざわざ会おうとするんだ？

あの人はあなたを、そしてすべての人を利用しているのよ、と彼女は彼の背中を触りながら言った、あの人のことは忘れて。

やつはどんな類いのゲームをやってきたんだ？

ねえ、もういいのよ、と彼女は言った。いったい何が？

どういう意味？

あの人はわたしを傷つけなかった。わたしは生き延びたわ。

そうだーきみは大丈夫だ、しかし別のことがある。

わたしを見て。ここへ来て横になって。

マークは彼女を見た。

何故あなたはそんなにあの人のことを気にしているの？

きみにはわからないよ、と彼は言った。

あの人にもう悩むことはないわ。

こういうことなのかい、今までずっとやつと一緒にいた後、紐がただぷつんと切れた、丁度このようにぷつんと切れた、ということなのかい？

すり切れたのよ。

彼女は彼を自分の方へ引き寄せた。

今わたしがしたいことわかる？

何を？

あのひとにここに歩いて入ってきて、そしてわたしたちを見て欲しいの、と彼女は言った。裸なのを。互いに抱き合っているのを。

そうしたいのかい？

彼女は彼を抱きしめた。

ね、と彼女はささやいた、あなたはわたしを最大限に利用したほうがいいわよ、わたしたち結局約一週間持ちこたえるだけでしょうから。

何のことを話している？とマークは言った。きみとおれのこと？

キスして。

マークは彼女にキスをし、そして起き上がった。

きみに一つ言っておくよ、と彼は言った。やつは重大な誤りを犯している。おれは馬鹿ではない。

29

やあ、マーク。

やあ。

何をやっているんだ？

何も。

おれを入れてくれるか？

もちろん。

彼らは階段を降りていった。

それで、とピートが言った、おまえ何をしているんだ？

いつだ？

今さ。

何も。

何かやっているように見えるが。

そんなことないぜ。

マークはテーブルに座った。

レンは入院してるぜ、ピートは言った。

レンが？

そうだよ。

やつはどうしたんだ？

腹の調子がよくない。不運に襲われた。

それはいつのこと？

二、三日前だ、とピートは座ったまま言った。重くはないが。

ふーん。

マークは窓の外の空を見た。

この家に晴雨計はあるか？ ピートは言った。

いや。

それは便利だぜ。

何故？

外がどんな状態かわかるからな。今日はいつもより寒い。

ここがないのをおまえ知ってるぜ。

いつもそれを持ち歩いていたやつが以前いたな。ポケット型で。そいつ自身の発明だ。

マークはポケットから爪やすりを取り出し、右の耳をほじくった。

で、とピートは言った、おまえはずっと何をしてるんだ？

いつ？

おまえに会ってからさ。

あれこれだ。

あれや何？

これ。

一目瞭然だよ。

マークは腿の上でやすりを拭いた。

執筆しないのか？ 最近何か書いたか？

いいや。

こつを忘れてしまったか？

そうは思わないぜ。

結構、とピートは言った。

マークは親指の爪にやすりをかけた。

さっ行ってレンに会う気あるかい

いつ、今か？

そうだ、とピートは言った。忙しいかい？

いや。

よし。

わかった。

今面会時間なんだ。

マークは左の耳をほじくり、やすりから耳垢をはたいた。

どうかしたのか？

マークはポケットにやすりを入れた。

何が？と彼は言った。

どうした？

どうということ？

ガスマスクをつけているぜ。

してないおれは。

ピートは微笑んで、立ち上がった。

行くぜ？

うん。

彼らは家を出た。どんよりとした日だ。彼らは池を過ぎて、病院の方へ歩いた。

天気のいいすてきな日だ、とピートは言った。ちょっとうすら寒いが。

彼らは歩き続けた。

木の葉が粉々に砕けている。悪い言い回しではないな。おまえどう思う？

何がだ？

彼らは電力会社のところで道路を横切り、そして歩き続けた。

レンのやつ、仕事中的れに電話をかけさせたんだ。丁度間に合ったが。おれは昨日退職を申し出たところだった。

そうなのか？

彼らは共同墓地の裏側を通って行った

どう、おまえのたくわえはどんなだ？ いつももう少し芝居を始めるつもりなんだ？
考えてない。

彼らは爆心地の廃墟のそばを歩いた。

ああとこで、とピートは言った。

強い風によって木の葉と紙袋がかさかさいった。彼らは消防署を過ぎて、病院に着いた。

何かいい本を読んだかい、最近？ ピートは尋ねた。

いいや。

彼らは病院の門のところで曲がって中に入った。

ヴァインシュタイン氏は？ ピートは言った。

C病棟です。

彼らは建物の中を歩き、階段を上がって二階へ行き、そして病棟の中に入った。見舞客はベッドのそばに座った。たくさんの患者たちはイヤホンを着けていた。看護師たちは遠くの端の方、盆一盛りの花のそばで集まっていた。ピートとマークは病棟を向こうへと歩いて行った。

仕切りシートの向こうにはいないと思う、どう？ ピートは言った。

売り歩きりや注文取りはだめだよ。

彼らは振り返った。

見えなかったな、ピートが言った。

驚きはしなかったよ、とレンは言った、シートを下げながら。

彼らはベッドの両側に座った。

きみたち来たね。

やって来たぜ、マークは言った。

ところで、これは全くどういうこと？ ピートは言った。

ぼくは、もう、すっかり元気なんだ、とレンは言った。ぼくにはすることはもうあまりないんだよ。

何故だ？

ぼくは何ら問題ないからさ。ここの看護師達、ぼくを王様のように扱ってくれるよ。

看護師達は花の盆のそばで立ち話をしていた。

王様のように、とレンは言った。

吸えよ、とピートは言って、マークに巻きたばこを一本渡した。

それはぼくには全くおあつらえ向きだな、とレンは言った。

長くいるのか？ ピートは尋ねた。

二日間で出られるよ。ぼくは動ける状態になってるよ。
マークは振り返って看護師達を見た。
彼女達は非常にいい連中だよ、レンは呟いた。
マークはこちらに振り返った。煙が鼻から流れた。
きみはまるでこぎ損ねてバランスを失ったように見えるね、とレンが言った。
何だって？
肝心な要素が不足しているように見えた。
おれが？
心地よい病棟だな、ピートは言った。
理想的だよ。
マークとピートは病棟をぐるりと見渡した。
最上質の毛布、自家製料理、とレンは言った、何もかもだよ。
マークは天井を見上げた。
低すぎることもなく、高すぎることもない、とレンは言い、そして咳の発作が突然起こった。痰つぼはどこ？
マークはベッドの下を見た。ピートはしびんを持ち上げて、それを掲げた。レンは小便のなかにつばを吐いた。
おまえはよく小便をしているな、とマークは言った。
きみがそう言うと思ったよ。
電話があった時、おまえは死の入り口にいると思ったぜ、とピートは言った。おれはおまえに中古の十字架を買うためペティコート・レインへ行こうとしてたんだぜ。
親戚の中できみが一番近い、と病院に言ったからね。
ピートは煙の輪を吐いた。
ところで、マーク、と彼は言った、パイプはどうしたんだ？
何もないぜ。
使えるのか？
きみ、パイプを吸っているの？ レンは尋ねた。
いいや。
ところで、とピートは言った、おれは昨日だめだとあきらめたんだ。
どう？ レンは言った。
おれは退職を申し出た。
何故？
もうたくさんさ。
これからどうするつもりなの？
何か探すよ。
商売を始めよう。
やれやれだな、レン、とマークは言った、おまえは非常に調子よさそうに見えて。

病棟が明るくなった。明るい窓を通して葉の群れが現れた。マークは床にタバコを落とし、踏みつぶした。

きみのせいでぼくは罪をかぶせられることになるよ、とレンは言った。

花の盆のそばで看護師たちが喋っていた。

外はどんな様子？ レンは言った。

ちょっと薄ら寒い、今日は、とピートが言った。

きっとそうだろうな。

太陽は出てきた。

それなら雨だな。

そうか？

ところで、マーク、とレンは言った、今週はトレブルチャンスをやったのけるのかい？

いいや。

訪問者たちはベッドから動いていった。看護師たちは、散って病棟を向こうの方に歩いて行った。

誰が戦車を運転している？

何？ ピートは言った。

戦車は誰が運転している？

聞いたってだめだぜ。おれたちはくっついた道を歩いて来たんだ。

きみたちはどうしたって？

レンはマークを見た。

くっついた道を歩いてきたって？

ピートはベッド脇のテーブルの上の受け皿でタバコの先をつぶして火を消した。看護師達は病棟を動いていた。

ベッドに座ってはいけないうちになっっているよ、とレンは言った。きみたち、椅子に座ることになっっているんだ。

さて、とピートが言った、おれたちはもう帰るぜ。退院したらドアをノックしにきてくれ。

そうだ、とマークは言った、ドアをノックしてくれ。

きみたちが家にいるかどうかどうやってわかるんだい？

ピートとマークは病院を出て、池の方に歩いた。太陽は消え、雨が軽く滑るように落ちてきた。

水平的な性格の連中だな、こうした場所は、とピートは言った。おまえはだけは垂直的だ。そのためめまいを感じるだろう。

マークは襟を立てた。彼らは消防署を過ぎた。

おまえは今までこのような場所の中にいたことがあるかい？ ピートは尋ねた。

はっきりしない。思い出せないぜ。

そうか、とピートは言った、ふん。

彼は襟を立てた。彼らは爆弾跡を通り過ぎた。

ところで、とマークは言った、雨で顔をしかめながら。

彼らは枯れ葉の上を歩き続けた。

何故おまえはおれの家のドアをノックする？

何？

さあ。何故ドアをノックするのだ？

何のことを話しているんだ？

彼らは共同墓地の裏を過ぎた。

率直な質問だけ。

ちょっと会おうと立ち寄ったんだよ、おまえ。

何故？

自分の会社にうんざりして。

しかしおれに何の用事だい？ 何故おれに会いに来るんだ？

何故だって？

おまえは自分でやっていることをわかっているか、あるいは知らないかだが。どちらにせよ、おれはその感じが好きではない。

そうむきになるなよ、マーク。

しかしおまえは自分が何をしているかひどくよくわかっているとおれは思う。何年も裏表のあるやり方をしてきたんだ、とおれは思うぜ、おれに関する限り、全てのやつに関する限りな。

追求するなよ、おい。

彼らは電力会社のそばの道を横切り、そして池の方へ進んだ。

おまえはげす野郎すべてを扱うようにおれを扱ってきたな。実際、おまえはおれたちのことなんか知ったことじゃないんだ。

おまえは後悔するかもしれないようなことを言い始めたな、とピートは言った。しかしわかった。続けるよ。要点を言ってみろ。

雨が一層激しい中、彼らは池に近づいた、水はぱちぱち音をたて、島のあたりで砕けていた。

おまえには顔が二つある、とマークは言った。おまえはおれを目の前では同じものとして扱い、そしておれのいないところでは、それは全く別のものになっていた。

おまえのいないところで？ これは子供っぽいな。誰が毒を注ぎこんだのだ？

彼らは池の端で立ち止まった。

おまえはおれをずっと騙してきた、とマークは言った。おまえは何年もおれを甘く取り込んできた。

これには誰かがちょっと接ぎ木をしたな、とピートは言った。おまえはとんだ大へまをしているぜ。誰がおまえに何を言ったのだ？ ああ、濡れてきた。行って一杯飲も

う。

彼らは道路を歩いて横切って、パブに入った。マークは座った。ピートはカウンターへ行き、二杯ビールを持って戻ってきた。

飲み干せよ。おまえは一つか二つ多少完全にもつれさせていると思う、と彼は言った。ヴァージニアへのおまえの態度は、とマークはテーブルに体を乗り出して言った、何年も罪が深いものだったぜ。

自分自身をしてみる、とピートは言った。おまえは全く理解が及んでいないぜ。

それはあらゆる角度からも犯罪的だった。そしておれはおまえにもう一つ言っておこう、とマークは言った、理由もないが。おれは昨夜彼女と寝たぜ。

部屋が止まった。それからピートはかちんと言うグラスの音が響くのを聞いた。今立ち上がって、彼はマークを見下ろした。

終わったな、彼は唾を吐き、そしてパブを出て行った。

30

マークは自分の酒を飲んだ後、彼のフラットに帰って来て、暗闇の中階段を歩いて降りていった、そして暗闇の中居間を通り抜けた。彼は台所で立ち止まって、外の庭を見た。雨の中暗くなって、庭は震えていた。雨は、灌木の上で斜めにつよく打ちつけ、木々の葉を暗くした。空は全くなかった。彼はネコがフェンスをはって通って行き、そして芝を飛び越えてライラックのアーチの方へ行くのを見た。彼はその後をじっと見つめた。それは戻ってこなかった、もしそれがまだ庭にいたとしてどんな動きにせよその気配を見せなかった。夜の罨が彼の周りで閉じた時、彼はしんとした部屋の中で憂いに沈んだままだった。夜が閉ざされた時、彼は窓を通して夜の外を見た。夜が深まる中、完全になるのと同じくらい早く雨が黒く落ち、そして群葉が塊の一部になった、そして庭はそれと判らないほど退いていった、そして彼は、ついにガラスにただ自分のかすんだ投影だけを見つけた、見ると、それは暗闇の最先端で、正面ドアを超えたところから、開けっ放しにされた全てのドアを通して、長いフラットを通して先が細くなって動いていた淡いランプの灯りによってもたらされていた。雨の降下が今そのさっと当たる音を際立たせ、静寂を飲み尽くした、そして、それが、次には雨を暗くする暗闇を振動させて絶え間なく動いている時、壁がその音をたて、天井が膨張し、部屋が巨大に形なく声をあげて佇む時、夜が深まって、彼は階段の方に顔を向けて閉じ込められたまま座っていた。

その後、最後の雨が窓敷居を打っていたが、彼は顔を上げると、玄関の広間にピートがじっとしているのが見えた。

おまえはそこにいたのか？ ピートは言った。

そうだ。

ピートは階段を降りて部屋に入ってきて、腰を下ろした。

おまえに聞いてもらいたいことがあるんだ、と彼は言った。

彼は背を伸ばして座った。

長くはかからないよ。

マークは壁の方を向いた。

おまえに驚いてはいないぜ、とピートは言った。しかしそのことはおいておこう。おれは話せる。言い分がいくらもある。おまえがおれを驚かしたからというわけではないんだ。

おまえがしなかったの。しかしそれは別のことだ。二時間で、そら、がらりと話しが変わってしまった。このことは済ませておかなければ。今やその時だ。おれがそれを言おう。それが最善だ。おまえは、言いたければ後で、言いたいことを言え。これで不公平ではないな？

いいか、おれは理解したいんだ。おれは自分が同感できないことを、大目に見ようとするだけにはできる、友情のためにな。しかし全く率直に言って、新たな愛情に駆られてそれを全て一掃しようとするなんて、おまえどうかしているぞ。

おれを真っ黒に塗ったおまえのやり方は嫌いではない。それはきっぱりとしているが、間違っている。おれは冗談ぐらい言えるが、しかしこれはあまりにも行き過ぎだ。

それは急所を蹴り上げるようなもんだ、本当に。それによっておれにはまだ人の苦痛があることが判ったが。それがすべてさ。見方によれば啓発的だった、が、それだけさ。骨にひびいた。骨は腹の柔らかな部分よりもはるかにもっと特異だぜ。

違うんだ。おれの気持ちは決してヴァージニアへの何ら大きな愛情や敬意によって動かされてはいなかった。無私ではなかったし、寛容でもない。だからあいつにはおまえは、おれがそうでなかったすべてになれたのさ。いいだろうよ。当然だ。おれたちに共通な何かがあった時、おれはあいつを大いに役立つものと考えていたが、しかしそれは非常に微々たるもので、そして全く正直に言って非常にまれだったので。

楽々と全て埋めてしまうことができるぜ。

いいか、おれはおまえが積極的で、寛大で、友情に厚いときには、おまえが好きだった。おまえが自分をさらけ出していたときだ。現在おれができることと言えば、その認識だけだ。

それは弾丸だった。しかしヴァージニアについておれを悩ませているものは何もない。おまえたち二人がやっていることは、おれには関係ない。

しかし重要なのはこのことだ。相当におまえは真実不足のために、おれには無頓着という点だ。かなり不足している。おれに反論できることが何かあるか？ 嘘か？ おれはおまえに隠れて嘘を喋ったか？ おれの徳の総計はそれだけか？ このことはすべて滑稽だぜ。勿論おれはおまえに隠れて話したことはある。おまえの特質や欠点についてだ。もしおまえが一つのことについて不満を言うなら、おまえはもう一方なしでも不満を言うだろうか？ 多分そうだ。しかしおまえはおれが賞賛しなくても全く上手くやるれるよ。

このふざけが続くよりもむしろおまえにおれの目を殴ってほしいぜ。おれはこの事のためでなかったなら地獄へ行ってもいいぜ。もちろん何もかもたぶん考えは動因となろう。

おれがいつおまえを好きでなかったかを付け加えておこう。おれがおまえを嫌いだったのは、女とのベッドとの合間におれは話し相手にされたと感じた時だ、おれたちが二人だけだったときはほとんどいつもそうだったんだが。おまえはそれは真実を損なうと思うかもしれない。おまえはやりがいのある、そして有益な多くのことが起こったのだと感じるかもしれない。

もしおまえがおれをいやしくも知っているなら、おまえが知らなければいけないことは、おれにとって人間関係はほとんどいつも二次的に重要でしかなかったということだ。おれの生来の気質は、一人でいることと、古いピアノを演奏することなんだ。いつもなんらかのメロディが流れている。わかるだろ。驚きじゃないんだ、ね、いかに善意があったにせよ、おれの友人達はおれの情熱をすっかり干からびて枯渴させていたんだよ。

いいや、おれはふざけ散らしているわけではないぜ。多分おれは玉を一つなくしてしまっただ、結局は。

おれたちにとって、それが意味することは、おれがおまえへの負債を返さなかったということだ、払うのに十分なものをおれは持っていなかったからだよ。おまえは自分の好意を污水溜に投げこんだのにひどく嫌気がさしているんだと、おれは思うぜ。おれとの付き合いが伝染病だったということ。あるいは進んでおれに食べ物を与えようとした手をおれが噛んだということ。あるいはおれが礼拝堂を汚したということ。しかしそのどれほどの多くが真実なのか？ おれは真の非難に直面して認めることができないような欠点をもっていない、しかし何のどれぐらいの多くが真実なのか、そしておれを非難する誰がいようか？

おまえはそれに一言言うことができるか？ なぜならおれはそれについて、おまえよりもっとよく全てを知っているからな。おれを信じろよ。能弁で不潔でそしてその他すべて。おれはしばらく前滑稽なことをした、それをおまえは理解するかどうか疑うが。お

れは神に魂のいい方を売った、そしたら神はおれに恩恵をもたらしてくれたんだ。

おれは生き延びて、ダビデの新しい「詩編」を書き記すことができる。多分おまえは彼がおれの理想の人の一人だと気づいていない。おれはキリストを信じてきたが、それは純粹に自由意志からだった。しかし恐ろしいものに関しては、まだそれへの言葉は全くない。それらは全く異なった何かだ。狂人はそれらを信じていて、そしてそれらを適切で決定的だと見なしている。それは議論の余地がある点だ。

しかし、おれたちが友情と呼んだこの頓挫以上のものがおまえやおれにはあると信じているよ。おれたちはそれと互いを、そして実際に他の全てを誤解してしまった。

もしおまえがおれの言うことを聞いて、そこから何かを得ることができないならば、おまえは真の自己を失ったに違いないぜ。

おれがおまえにとりわけ理解してほしいことは、おれたちは互いの目を真っ黒にするほどの殴り合いの機会を持つべきだということだ、もしそれが必要と決心したなら。また、おまえやおれのような純粹な神の賜物ではない人間は、情事の後も生き残るべきということだ、悪意があったり、愚かであったり、あるいはへべれけであったりすることなく。

これでおしまいだ。

マークはじっとしたままだった。

おまえは言いたいことが何かあると思うが。

そうだ。とマークは言った。あるぜ。

彼は壁から振り返って、姿勢を正した。

うん、そうだろうな。

彼は火床をのぞき込みそして部屋を見渡した。

重要な点は、いいかー

彼は背伸びをし、天井を見上げた。

おれの頭痛の種は、と彼は言った、おまえが実際おれを馬鹿野郎と考えていないかということの納得なんだ。少なくともおれはおまえは違うと決め込まなければならない、いやしくも何か言う前に。

それでおれは目下のところは、おまえはそうでないと決めてかかるう。

おれはずっと聞いていたが。

わかると思うが、おれは認めるよ、ピート、おまえは軽蔑を与える権利を保有するということを。おれもそうなんだ。おれは又認めるぜ、非常に多くのおまえの時間が、おまえが大事だと見なす他の何かと調和させようとして費やされたことを。

しかし結局はそうとなるとき、おまえは逃げ出せない軽蔑の砦を住まいとしたように見えるぜ。おまえは理屈では和解できる。おまえはそれを可能だと信じていい。しかし実際はあらゆるものはおまえのオープンで料理されていて、おまえのためにあり、おまえのためでなければならない。

おまえは他のやつオープンでは料理できないんだ。

おまえは友情やいろんな物は決して生産的ではなかったと言う。そのときほとんどの時間、おれは思い違いしていたぜ。実のところ、おまえは決して共有していなかったんだ。おまえはできなかったんだ。そのようにおれは騙されていた。それに憤慨するぜ。おれは時々共有があり、出会いがあるかもしれないと思ってた。おれは間違っていた。そしておまえにはそれがわかっていて、いつも。

大事な点は、どの程度までおまえが、実際、責任があるかだ？ おまえは責任があり、そして連座していると見なされうるか、見なされえないかだ？ おれが言うのは、何がおまえにとって重要であるのかなんだ？ きっと、そうありたがっている友達ではなく、ただおまえの要求に合う限りにおいてのみの友達だな。彼らがそうできなかった場合、軽蔑が、おまえ自身の論理では、唯一の結果となる。それが彼らの墓碑銘さ。友達はおまえにとってはアカデミックな失敗の練習になった。彼ら自身が必然的に失敗したためではなく、単に彼らが自身のものを持ち続けようと試みて、おまえを失望させたためであるんだ。

おまえには全く他の判断基準がない。

おまえはいつもおれが破滅の主だとわかっていて、けれどもおまえはおれのドアをノックし続けた。なぜだ？ おまえはおれを対等と考えたからか？ 絶対にそうではない。それはおまえが実際おれをまじめに受け入れてこなかったからだ。おまえからすれば、おれは最初から全く回復の見込みがなかった。おまえはレンやヴァージニアにはしたかもしれないように、おれに救済をもたらすことはできなかった、それでおれはおまえの道徳的考慮外だったがゆえに、付き合いは差し支えなかったのだ。おまえはおれを間違った方向の目立つ実例として使うことができたんだ。まがい物として。

しかしおれにはわかるぜ。もう一つあるな、おれがわかるのは、わからないと考えない

方がいい。おれたちは会ったな。おまえとおれ。あるときバス停で、酔っ払っていた。しかしおまえが一人だったそのとき？ おまえが一人の時は信用できない。

おれの中にいるに違いないのは、一人でのおまえだ。あるいは無だ。これ以上、ゲームを行うねらいは何なんだ？ おれには何の益も見当たらない。

おまえは骨格のことを言う。本質とは何だ？ おまえは吸血鬼だったということ、そしてそれをおまえは認めるのが賢明だぜ。

おれたち、おれたちのすべては、おまえの見世物芝居で悪ふざけを演じ、おまえの宮廷の中で忠誠を払うのに必要なだけだったんだ。いいか。友人の機能は、おまえが友人と呼びたいからなんだが、おまえからおまえへの使者のそれであったに違いない。仲介者だ。それでそいつはおまえの魂の従者になる。しかしもうたくさんだ。

おれたちすべてはおまえの共犯者だった、しかしおれのは最もはなはだしい罪だった。おれはあまりにも長きにわたっておまえにそれをぬけぬけとやってのけさせてしまった。

要点は、おれは賞賛してきたということ。おれは戦おうとしておまえを賞賛してきた。おれは、おまえと共に殺すことを楽しんで来たが故に獵場に留まった、いかに多くのネズミの臭いを嗅いだかもしれなくとも。なぜならそれは野郎の類、おれがまたそうでありうるペテン師の類だからだ。おれは微笑み、それは良い微笑みと思うが、それがどんなのであるかを見るためおれは鏡で見る。それでおまえは決して実際おれをおまえの台所スタッフにしなかった。おれは同時におまえを演じた。それは全く汚い裏切りだった。確かにおれはおまえを利用した。

しかし同時におれは何がいいことだったかを知っている。おれは、おれたち二人にもかかわらず、何が本当であったかを知っている。おれは何が有効であったかを、チーズのどの部分が腐らないかを知っている。なぜならば、二つの頭を持った怪物においてすら、同棲は生き物の体の中に健全な何か生み出すからだ。

おれは問題を暴露する、しかしそうだからといって、おまえがいつもおれの家に間違いなく投宿したとの事実は変わらないぜ、そしておれはそれを後悔しない。そのことは変わらない。しかしおまえは自分のシーツ、毛布、あらゆるものを持ち込んだのはあまりにも頻繁すぎた。おまえは、自分の言う通りの条件で泊まらなければ気がすまなかったのだ。しかし中の家具を変えることはできなかつたぜ、なぜならおれの足が根付いていたからだ。おれは自分がどこに住んでいるかわかっている。おまえは馬鹿ではない。おれが同じくらい狡猾だとは知っていた。しかしヴァージニアに関しては何もおまえを止

めることができなかつたんだ。おまえは王国を失ったかもしれないが、そうしたのはおまえ自身の破滅だった。おまえがその問題をだめにしたんだ。おれは必要とされた。そのことがわかっているか？ しかしおれはおまえから何も取らなかつたぜ。それは全くおまえ自身のなせる業だ。

おまえは敗北したかもしれないがおれは勝ってはいない。それがおまえにはピッタリ嵌まってほしかったものだ。

彼女は転地を必要とした。おまえは生存する、しかし、ただ彼女も彼女自身の権利でそうだとすることを忘れないでくれ。そしておれも生きています。

いいだろう。おれは喜んでおまえと会ってお茶を飲もう。しかしおれはおまえの道化にはならないし、おまえの「黒い騎士」にもならないぜ。

彼は中断し、深く座り、待った。

さて、とピートは言った。

彼の眼は細くなり、彼は口をこすった。

さてさて、と彼は言った、それは非常に面白い。

もしおれたちの正体やおれたちの領域境界をはっきりさせるということになれば、残念ながらおれは正直に自分にはできないと思う。おまえはもっと素直でまともなので、そうできるのは自分の範囲内だと思うかもしれない。

もっとも、おまえがおれの欠点を認めることにおれが満足しているなんておれは言えないぜ。おまえが指摘することは、実際いくら重要な今なおある欠陥だと信じなければならぬ。しかし、それはおれがおれ自ら進んで宣言したたぐいの道には必然的なものなんだ。

おまえもヴァージニアもおれの内部の聖壇の神ではないことは常にわかっていた。おれはできる限り注意深く又、正直におまえたち二人を考察してきた。そして普通の作法においてすらおまえたちは、無知で、値しないということに気づいた。おれがそれに仕向けようとした時でさえだ。

経験はテストする場所だ。このことにより、おれが生き残って死者を他の人々に押しつけることができないことが明らかになった。おまえたち両者が生存してきたのはそのおかげだ。それならそのことに気がつけるがいい。考えを改めろ、悪臭がすべてに染み渡っ

ているんだから。

おまえが言っているように見えることは、おれがおまえの期待に背いたということだ。おまえたち二人はおれを非難することを好む。おれはこれを致命的な原因にしようとしてこなかった、しかし、もしおまえたち二人が用心しないなら、それは多分致命的となるだろう、おまえたち二人には。それによっておまえたちは死に窒息するだろう。その言葉を伝えてくれ。あいつとおまえ自身に、おまえが今まで何とかやり遂げてきた以上のはるか大きな恩恵を施すことができるぜ。

それはすべてどこに由来するのか？ そうだ、おれは認めるが、著しく圧倒的にそれはおれに由来する。こと全体はおれの子宮の子供だ。おれはおまえに謝ることはできる、が、おまえだけがおれを許すことができなかった。それはおまえが勝手にできることではない。このことにおまえは耳を傾けなければならないぞ。おれはできないぜ、罰当たりなことだ、おまえの誤りに謝罪するなんてことは。

おまえは友情をおれを打ち倒す道具にした、そしておまえは立ち去り、ヴァージニアと寝た。おれはこれについて非常に怒りを感じる、いわれがないわけではない。おれは進んでおまえを友として受け入れようとしていたので、おれはこの話題を避けただろうからだ。おれは信じないー実際しないだろうーそのこととおまえに対し深い恨みをもつことを。いずれかと言えばおれはもっとおまえが好きになれる。しかしおれたちの立ち位置については全く疑いがないようにしろよ。これに対しては、それだけで他と別にして、おれに価値を与えよ。おれにそれを表に出させてくれ。

ここまでで、もうこれ以上ないが、おれはおまえたちの誰よりも賢明で善良な人間だということがはっきりとなった。おまえは信じないかもしれないが、そう思うんだ、おれは、おれの本質的な側面において神なんだ。勿論、おれは崇拜されるはずはない。おれは堪え忍ばなければならない。しかしおれは、ほとんど死ぬほど、自殺するほどに、レン、ヴァージニア、なかんづくおまえによるこの推測にうんざりしているんだ、本質的にはおまえの動機であり関わりごとであるこの一連の愛と絶望とに、いやしくもおれが何か関係があるという推測だ。おれは関係していない。おまえを手伝ってやれる。おれはおまえのために祈ってやれる。自分自身の国の予言者だ。しかしおれがおまえを我慢して受け入れることができると思うのは滑稽だぜ。

おまえはおれと友人であろうとすっかり試みてきた、そしてそれゆえできる限り長く十分に、おれはその感謝をするだろう。しかしもしおまえが内部に入り込んできて、おれの内蔵を食らうならば、おれは常に嘔み返すだろうよー容赦なく。おれは長く苦しんできた。おまえはおれの腹の上で飛び跳ねていた、おまえはおれの頭をぶん殴ろうとし、

おれの血流を汚染しようとし、おれの内臓を切り裂いてミンチにしようとした。おまえは人を見捨てることをし、おれがおまえを必要とした時につまらない、より小さな、寄生するよそものになった。

おまえは監視していて、決して実際同情的でなかった。おれの発揮された才気煥発さにおまえは夢中になったのに。おれはいつもおれを使えるようにしてやっていたんだ。おれが予期していたもの以外には何ら報いはなかったな。お茶を飲みながらの冒流的で強欲なおしゃべり屋や不満家、そして虚栄、無知と道徳的自殺による破滅の必然性。

幾つかのことについては多かれ少なかれおまえは的を得ていたと言おう。

もしおれがいやしくも神だとすれば、それは無益と悔恨の神だ。おれはおまえに決して何もしなかった。おれはしたい。おれやってみよう。おれは目覚めたんだ。おれは十分に目覚めた。

おまえはこれを取ったり、あるいはそれを捨てたりできる。しかしながらおれは、もし穀物倉に粉にする小麦も全くないならば、それはきっと破壊的になるに違いないと指摘するのは価値があると思う。おれはそのことについて騙されてはこなかった。おれは運転レバーを見つけたらいつかは世界を動かすぜ。おまえ自身は幸運だと思うがいい、しかし調和の感覚は保てよ。

勿論おまえを破壊するためにおれがしなければならないことは、おまえを望むようにしておくだけだ。おれはきっとおまえの正体を暴く呪いをおまえにかけることはできる。しかし、おれは復讐することを望まない。おれはおまえを呪う必要はない。良識の異議申し立てには終わりはない。しかし真実がおれのものである限りにおいては、その力も又そうだ。それは常にそうだった。そのようにおまえには助言を与えられるぜ。おまえがしなければならないことは動くことだ。おまえにその機会がある間にな。おまえはよんだ水たまりだ。おまえには、全く率直に言えば、終わった人間の雰囲気があるんだ。

おまえの社会的欠点におれは関心がない、もしもおれがおまえを信頼できたとしてもだ。しかしおまえはおれにそれらを信用できるとして理解してもらいたい時にあまりに多く求めすぎる。おまえの道徳性、おまえのベッドマナーはおれがもはや口出ししたくないものだ。それはおまえの悪臭だ。それを保持するがいい。しかし問題なのはおまえの誠実さなのだ。おまえはそれに値すると証明していない。おれはおまえに正直であることを求めている。おまえをベッドに導いたのは恐れと怒りだった。ひどいへまさ。おれの高潔さが多くの機会で消滅したのは真実だ。それをしたのは挫折と憎悪だ。おれはどんな犠牲を払っても生き延びなければならなかった、そしておれは善意でもって噛みつき、切り、むち打った、そしてそうすることを楽しんだ。それは全てに優先する正義の問題

だった。何ものにもましておれは信じたか、おれが殺されたことはおれにとっては圧倒的な災難だったただけのみならず、人知の総計における埋め合わせのきかない欠如であり、善を生み出すための取り返しがつかないほどの失われた機会かもしれないということ？ それについて気にかかっていることはほとんどない。それは全て憶測だから。

おまえはこのベッドの件で自身を愚か者にしたとおれ思うぜ。それはガン、ガンと鳴り響く音だ。その残響が消える時、おまえはそこにいてその廃墟を微笑むことを願う。おれが間違っていると思っておまえはそうしないだろうが。この忌まわしい一件が跳ね返り、どこに由来するのかわからないようなそんなきんたまの破裂をおまえに与えるだろうよ。

しかしもしこれが創造の現状とするなら、おれはもう誰からも嘔むことはないだろう。肉体は腐った匂いがする。おれは飢えるだろう。おれはレンが投げ捨てたパン屑を何でも笑った。おれは、おまえたち二人が与えようとした快適さに気づいていた。こう言おう、たとえそれによっておれが破滅しても、おれはそれに感謝すると。しかしそれによっておれがその結果に盲目にされてはならない。おまえたちはおれが完璧であるはずゆえにおれを非難する。ちがう。そしておれはおれの欠点からもてあそばれることはあり得ない。おれを単に愛情で誘惑するな。おれには、それについて申し出るのがおまえたち一ダースよりもっと多くいるんだ。単に真実を聞け。それはおれたち全てにとって屈辱的だったがそれは何か善をなすかもしれない。

おまえはおれが立たされている苦境がわかるはずだ。おれは進んで耳を傾けるぜ。おれは理性的に聞くだろう。おれは行って理解するだろう。それに足を向ける。しかしおれは言いつくろって、もっぱらおまえの寸法をとるためにおれの服を仕立てることはしないぜ。試練の精神では、ほとんどのことはありうる。その理由でおまえは地獄へ行くことはありうるぜ。二人とも慣習に従おう。おれはできるだけ行こう。もしおれたちが会えなければ、残念だが。しかし真実に関する限りでは、おまえには更に遠く旅する先がある。もしおまえがそれはそれに値すると思わないなら、おれは残念だ。何マイルものいい道が無駄となるだろう。

過去において、おれは、おれについての裏切り者の正直な真実を話すことができなかつたし、それをおれの習癖にしてこなかつた。今回おれはした。おまえはそれを聞いたのだよ。

マークは答えなかつた。ちょっとした後ピートは立ち上がって、そして窓まで歩いていった。

おまえのためにおれは、と彼は言った、全く辛らつになつたぜ。それを言っとかなけ

ればならないという仮定に立って、おれはそれを言ったんだ。
マークは咳をし、そして炉床に唾を吐いた。
辛辣さのために、おまえは肉や塩の見分けもできなくなってしまったことがないことを願うぜ。
そうなったと思う、とマークは言った。
彼はマッチを擦って、そしてそれが燃えるのを見た。
わかった、とピートは言った。これでおれは不愉快な義務から解放されるよ。

31

彼らは食べるのを止めた。ホイッスルが吹かれたら、すぐに脱出となるだろう。全て彼らの持ち物は山となって積み重ねられている。しかしぼくは何も聞いていない。警報の原因は何だ？ 何故全ての物が荷造りされているのか？ 何故彼らは出発の準備なのか？

しかし彼らは何も言わない。彼らは一文もなしでぼくを勘当した。

そして今彼らは、火のそばで足を組んで、目を大きく見開いた小獣皮に腰を落ち着けた。それは耐え難い。ぼくは窮地に置き去りにされた。腐りかけたフランクフルト・ソーセージすらも、ベーコンの一切れの皮も、キャベツ一枚の葉も、黴びだらけのサラミー切れさえもない、ぼくたちが昼間に昔話を語った日々に彼らはよくほうり投げてくれたような。彼らは腹一杯になって、座っている。しかしぼくはネズミの臭いを感じている。彼らはより珍しい料理、より上等の食卓の食事を期待しているように見える。

そしてこの変化。ぼくの周りの全てがこの変化。ぼくが知っている中庭にはちらばっていた、ネコの肉の切れ端、ブタの睾丸、ブリキ缶、鳥の脳髓、全ての小動物の断片、押しつぶされたキーキー言うカーペット、汚物に吐き出された小人たちの食べかす全て、有毒のくそだまりにくついた虫、裏通りは小便、ヘドロ、血や果汁が渦巻いた水たまりが。

今は全てががらんとしている。みんなきれいになっている。全て洗い落とされている。芝がある。灌木がある。花がある。

注1 テキストは、Harold Pinter, *The Dwarfs: A Novel* (London: Faber and Faber, 1990) を使用した。